

オラリオにスタンド使いが集まるのは間違っているだろうか？

託しのハサミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

迷宮都市オラリオ、そこには数多のファミリアが存在し、ある者は強さを求め、ある者は英雄に憧れて、ある者は自分の価値を探すために、ある者は贖罪のために、ある者は自分の家族だけを守るために、ある者は……この世界に理不尽に抗うために皆、暗闇の荒野を切り開くような『覚悟』を持ってダンジョンに挑戦しに行く

初投稿で駄文ですので直したところがいいところがあったら出来れば教えてください。お願いします。

目次

プログラム 4	12
プログラム 3	9
プログラム 2	4
プログラム 1	1

プロローグ

おかしい…今なぜか何もない空間にいるんだが、ここが何色か分からない黒か白かも分からない。そもそも俺は確か野良猫がおやつ代わりを持っていたチョコレートを持って行こうとしたのを見てそれを取り返そうと思ったら全速力で逃げられt…ん？そういえば俺はその時にどこにいたんだっけ？そもそもどんな猫だったのかすらも分からなくなってきた、確かその時に友達と一緒に追いかけていこうとして、あれ？友達の名前もどんなやつだったのかも分からない、そもそも俺の名前や顔、体もどんなのだったのかすら分からなくなってきた。というか今自分がどんなやつなのかすらも分からなくなってきた？

ヤバい、なんかヤバいこのままじゃヤバい気がしてきた

「うわー、少し目を離したらかなりヤバい状態になってたー」!!!?

「誰？…ここはどこ？かなりヤバい状態ってどういうこと？」ってと言おうとしたのに言葉が出てこない

「んーなんて言おうとしているか全く分からないし、時間がないみたいだし一方的に言っておくけど、君は今から君がいた世界とは別の世界に転生させるから。」

……………えっ!!!!!!?

「取り敢えず強力な特典は与えるけれど、チートって言うわけではないからーあんまり調子に乗ると酷い目に会おうことになるから気をつけてねー」

えっ！なんか気が遠くなって、待って、特典のないようは？まっ
て、どんなせかいにてんせいさせるきなの？maって、なんかかうま
kしやべれなi、matte、まtte、matte、matte、m
a t t e、 m a t t e、 m a t t e

……………「あー安心してー転生が終わったら特典について説明させるからー」

何が何だかんだ分からない。ジョジョ？スタンド？オラリオ？今自分がどこにいるのか、いいやそもそも自分の名前すら分からない奴がどうやって行けばいいんだよ。そう思っていたら急に小屋のドアが大きな音を立てて開き出した。

「誰だお前はー！ここで一体何をしてやがるる！！！」

そんな叫び声を聞いて声が出された方向を見ると自分の2倍以上の身長を持ち、服は着ているものの前だけ大袈裟に開き今ここにあるもので攻撃しても傷の1つもつかないような腹筋を剥き出しにしている男が慌てたように小屋の周りを見渡していた。

小屋にいた僕に怒鳴り込んできた男は僕の2倍近くの身長があり、その大男が僕を見た瞬間絶望したような顔をしたと思ったら辺りを見渡し、僕に向かって「なぜここにガキがいるんだ!!?まさか思うがこんま『あれ』を見ていたのか?」

「あれ?」

「そうか…見ていないんだな、見ていないんだっいたらいいんだ「いいわけねえだろうがグズがあああ!!」」「グゲエガア」「!?」

僕を怒鳴りつけていた大男に後ろからその大男の肩くらいの大きさの女性が大男の背中を蹴り飛ばした。

「馬鹿か、クソが！見ていようが見たいまいが、どうせ1匹のガキがいなくなつたところで私達には何1つない問題がないんだから怪しいんだつたら連れ出して屋敷ん中でぶつ殺すなり、変態どもに売りつけるなりすればいいだろうがとつとつとそのガキと『アレ』回収してとつとと帰るぞ」「ヘイツ!!」

そう言つて女は僕を睨みながら……僕のお腹に小型のナイフを何の躊躇もなく差し込んだ。

「ツツツ?!えっ?」刺されたところがとても熱く熱く感じ始めて次第に表現できないような痛みが一瞬で湧き出てきたと思うとすぐに意識が遠のいてき始めてきた。意識が遠のく中で女が何か話しているようだったが、大男が小屋の中床下を剥がし始めそこから弓と4本の矢を取り出したところを見たところで自分の意識がなくなつてしまった。

プロローグ2

お腹の激痛で目が覚めた時には、先ほどよりも大きめの小屋の中にいたが、自分の両手と両足に鎖の付いていない手錠のようなものがついてあり、自分の周りに僕が横たわるだけで触れそうになるくらいの大サイズの円の中にいた。辺りを見渡す限り周りに人は見当たらない、代わりに四角い箱みたいなのが自分を取り囲むように置いてあるだけだった。とりあえず辺りを探索しようと思い立ち上がろうと起き上がった瞬間、お腹の刺された部分が痛み始め見て見ると傷の治療はされているのだが、傷の下の方に6桁の数字のようなものが書かれてあり、触れて見ると書かれてるのではなく刻まれていたことがわかった。暫くすると1番左の数字が変わり始め、自分にあの時のように刺されたような激痛が走り出した。

「痛いっっ」

あまりの激痛だったのでつい声が出てしまった時にだった、小屋の扉がゆつくりと開き始め誰かが入ってきた。辺りが暗く、誰かは分からなかったのだが、扉のすぐに近くに木の棒を差し込んだら火をつけると自分の方に近づいてきた。

「以外と起きるのが遅かったな？薬の量を増やしすぎたからか？」

そこにいたのは自分を刺したあの女だった。

「あんたは…」 ドスツ 「グハッ」

「あ、ん、たじやねえだろお？フーカー様だって言ってたよなあ？聞いてたよなあ？私が喋っていた時にはお前はまだ意識があつたんだ聞いてねえなんてことはねえ。という事はだ、要するにテメエは私の名前なんか覚えたら価値がねえと勝手に判断して忘れた訳だなあオイっ!!」ゴスツゴスツゴスツゴスツ 「グハアアア」

その女は僕の刺されたところを蹴り始めた。あまりの激痛に何も考えられなくなってきた。

「よくねえな、よくねえよなあ!!人の話の価値を勝手に決めつけて聞かないなんてよくねえ事だよなあ？」ドゴスツ

ある程度蹴りつけたら満足したみたいなのか、最後に思いつきり踏

みつけれななんとか終わったようだったが、あまりの痛さに泣き出してしまいそうになった。

「まあいい、説明してやる。気づいたと思うがお前の腹のなかには数字が刻まれている。その数字は時間が経つたびに減っていきお前に刺された時の痛みを頭の中に届けさせる。実際には痛いと感じるだけで腹の傷は何一つ関係ないんだがその数字が減って行くとびに痛みはどんどん大きくなってお前の頭に届けさせる今は03:11:10分かるかどうかは知らないが今から3日後の、そして今の時間から1時間10分後に最大の痛みを頭の中に届けさせる。「ウツ」ほら、今も最初よりも強い痛みを感じただろ？左の数字が1つ減るたびに

当時刺された痛み×減った数字×0.02倍の痛みをお前の頭に届けさせる!!それと、この数字は何もお前の命のカウントダウンというわけではない。ただ痛みが増していく回数を表しているだけであって、この数字が全部0にならなくても余りの痛みでショック死する奴もいる。逆に痛みを耐え切って、数字が0になっても死ななかつたやつもごく稀にいた!!だが今、お前みたいなガキが最後まで耐え切ったことなんて見たことすらねえ。ガキは刺激に弱いから!!だが、1つだけ助かる方法があるお前の周りにはある4つのカメラがある。それは、私達の顧客にお前の映像を送りつけているんだが、それつらから気に入られればお前を買い取ってもらえたらそれは解除させるから自分をアピールしな、買い取ってもらえたらそれは解除させるからn「があ”あ”あ”」はあああ、まあお前は見た目が女みたいに可愛いから割と人気になるかもしれないねえから必死に媚びでも売っておいたらどうだ?もしかしたら早めに買い手がつかもかもしれないぞ?まあせいぜい頑張ってくれよなあ」

そういうながらフーカーは小屋から出て行った。

「ハアハア」

あまりの痛みで考えがまとまらなくなってきた、どうすればいいんだ?取り敢えずここから動かないと、痛みで朦朧としながらもなんとか立ち上がり円の外に出た瞬間に両手両足についていた手錠と足錠が急に光始め僕の足が自分の意思とは関係無く強制的に円の中に戻

分で捨てることと同じことだ。」「『覚悟』とは!!暗闇の荒野に!!進むべき道を切り開くことだッ!』誰が言った言葉なのかは分からない、だけれど、折れるものか、諦めてたまるものか、抗ってやる。この苦しく残酷なまでの理不尽に抗ってやる。この世界に生まれた時に言われた言葉を思い出した。

(そうだそうだ君にはオラリオに行ってもらうからねそしてオラリオで冒険者になって貰うからよろしくお願いしまくす。)

覚悟は決めた、行ってやるよ。オラリオに。

少年が理不尽に諦めかけていた時、周りにある4つのカメラの内の1つから映し出された映像を覆面をつけたエルフの女性が少年を見ていた、その女性は覆面をつけていても美人であることがわかるくらいに美しく、耳はエルフであることを示すように普通の人よりも長く伸びていた。だが、彼女の周りには普通とは違いく数多く人間の死体が倒れていた、種族や性別、年齢には共通点が無かったが1つだけ唯一の共通点があった、それは全員が闇派閥に所属していることである。そしてエルフの女性は闇派閥に自分を抜いたファミリアの仲間達を闇派閥の怪物進呈で殺され、その報復としてこのような事をしていった。

彼女が今回殺した人達はオラリオの冒険者や孤児の他にオラリオの外の国から見込みのある人間を探し出し、その人間を買い取り「神の恩恵」を授け、その人間の臓器を本人が生きたまま抜き取りそれで多額の利益を出していた者たちであった、「神の恩恵」を持った人間は、持っていない人間と比べて健康状態がよく普通の人間と比べてオラリオの中でも何十倍、何百倍の価値がある上、彼らはギルドの職員に金を握らせオラリオの外に出て外の世界では貴重な冒険者の臓器

を更に高額で売り回っていた。

オラリオでも彼らの魔の手に掛かった被害者が少なくなく、エルフの女性が所属しているファミリアは彼らの悪事の証拠を集めていた時に怪物進呈でファミリアの全滅の危機に会い、主神がホームを留守にした際に証拠の隠滅のためにホームごと爆発されてしまった。その時にホームに4、5人の子供がホームの中に入りその瞬間に爆発したらしく、その人の形を保ったまま見つかった子供には臓器がいくつかなくなっていたという。エルフの女性は怪我の完治が終わり次第、闇派閥を潰すために自分の主神を都市外に避難させ、今回のようにオラリオの治安を歪めてきた闇派閥を1つも残さず潰すためにこのような事をしている。そのため今回のように闇派閥の悪事の一部を見ることなんてありふれているだが、今回のようにまだ助かる可能性のあるものはあまり見たことがなかったが今は彼女にはやらなければいけない事がある、この子が何処に捕らわれているのかは大体予想出来る。恐らくだ、2人組の人攫いだと思う。確かあそこの1部の森に魔法がかけられていて……いいや、やめておこう。それに、自分にはもう正義を語る事なんて出来ない、だから彼を、何処の誰かも分からない子供を助けるなんて出来るわけg…『いや、いや違う!!!このまま自分に降り注ぐ理不尽をありのまま受ける入れるのは『覚悟』とは言えない。それは自分の人生を自分で捨てることと同じことだ。』っ!!そのセリフはきつと少年が誰かに聞かせるための言葉ではなく、自分に言い聞かせるために言った言葉だが、そのセリフはエルフの女性を振り向かせるには充分だった、彼女は咄嗟にその場を離れ自分の隠れ家に向かいすぐにオラリオから出る準備をはじめた。あの少年がいると思われる場所に向かうために

エルフの女性………リユール・リオンは向かった

プロローグ3

少年は覚悟を決めた。だが、どうすればこの状況から逃げられるかは何も分からない。ただ1つで気になることがあった。それは手錠が言っていたスタンドという単語だ、最初の小屋で聞こえた声と言っていたスタンドと同じ意味ならばもしかしたら自分にもこの手錠と似たような言葉が使えるのかもしれない?!?そう思ったら突然少年の頭の中にフーカーに刺された時の激痛とは違う衝撃がかかり、突然あらゆるスタンドの能力、パラメータ、姿などが頭の中に入り込んできた。だが、フーカーや手錠の男の能力に似たような力は確かにあった。どれも似ているようで全く違う能力だった。しかし、彼にはそれだけの知識だけで充分だった。自分にも使えると言うのが今の出来事で理解できた。そしてこの場所から逃げ出す方法も1分ごとに僅かだが確実に大きくなっていく激痛を受けながらも考えようとしていた。

だが：

バンツ「オイうるせえぞ、クソガキが外まで聞こえて来たぞ、助けを求めてるみたいだったら無駄だ、そもそもここに小屋があることから周辺の住民は知らねえ、迷い込む可能性なんてのもねえし、もしここから抜け出しても小屋の外の森からは出ることすら出来ねえんだ。」

「………なんで」

「あ？」

この時フーカーは少年が「なんでこんなことをするんだ」と言う言葉かそれに似た言葉が来ると思っていた、今までにそれに似た言葉をかけられたことなんて当たり前のようにあっさり、いちいち命乞いの言葉に耳を傾けていてはこの仕事には向かないというのも理解している。だから、今回少年の言葉にフーカーが反応したのはほんの偶然だった。

「なんで、僕の声が聞こえる所にいたんだ？」

「なっ!!」

だからフーカーは少年のこのセリフに対し分かりやすく驚愕してしまっただ。

少年の言葉は止まらない。

「最初に小屋から出てから結構な時間がたった」

「それこそ小屋の周りから離れ、安全な場所に逃げればいくらに時間があつた。」

「それこそ、この小屋の外の森から逃げ出すことも入ることまでも出来なくさせる魔法をかけているのなら、尚更お前」がここにいる理由がないんはずdウツ…」

初めて刺された時よりも倍以上痛みで顔を歪ませながらも少年の言葉が続く

「そもそも最初からおかしかった、手錠の男はきつと最初にお前と一緒にいた男のはずだ、そいつは手錠越しから俺に話しかけてきた。」

「けどお前は、俺に直接会って話しかけてきた。」

「おかしいよな？」

「お前とあの男は2人で行動していた。」

「手錠と足錠を掛けていたのはあの男かもしれないし仲間がいるのかもしれない。」

「だが、お前は手錠の男みたいに手錠に喋らせるわけでもなく、手錠の男に言わせるわけでもなく、直接僕に話した。」

「なんでそんなことをしたのか。」

「お前が俺の声に気づいた時に怪しいと思った。」

「あなたのスタンド能力は、痛みを相手に伝える時には必ず相手にある程度近づかなくてはならないんだ!!!」

「なっ、なっ、なぜ……いやっ!!あたしの弱点がわかったところであなたにはこのまま売られるか、放置してシヨック死する。その二択しかないんだ、痛みを伝えるには相手に近づかなきゃならない?んじや離れなければいいだけだろうg」この手錠の男もきつと今の光景を見ているんだよな?」!!」

「この円から出ようとした時に手錠の男が言っていたんだ。『その円』って『その』ってことは見ていたってことだよな?あの時に手錠

の男は大きな声で笑っていた小屋の中からそんな声は聞こえなかったし、その時に扉は全部閉められていたし、外からの声も聞こえなかったという事は、ここにある4台のカメラのうちの1つから俺の顔を見て居るのか？手錠の男オオ!!!」

「ブガラ!!そいつの両手両足地面に擦り付けるさせろ。」

『了解。姐さん』スゴオン

突然少年の両手が地面に叩き付けられ、両足も跪くようにつけていた。

「だ〜く〜それがどうしたって言うだよ アア?」

「要するに今のこの場所にはお前1人しかいないって話しをしたかったんだよ。」

「そーだよ、今私はこの場所に1人しかいない。だが、たった今ブガラがこつちにやってくる。あんたが言ってた最初にいた男のことだよ。そいつのスタンドは戦闘向きではねえがアイツ自信はLv3の実力者だ、恩恵のないお前じゃどう足掻いたって勝てるわけが……さて、なんでお前はスタンドについて知ってる?ブガラが口を滑らしたとしても私はスタンド使いだなんて1度言っていない。この世界ではスタンドについて知らない奴の方が圧倒的に多い、オラリオでは知ってるやつもいるかもしれないがその殆どがスタンド使いだ、なのに何故なお前はスタンドについて……まさか「エアロスミス!!!」何っ!!!」

突如背後か空を飛ぶ物体が現れた。それは戦闘機、戦闘機の形をしたスタンド『エアロスミス』それはこの世界の人物から見たら見たこともない空を飛ぶ鉄の塊だった。

「普通に人型のスタンドを選んでもお前にはきつと届かない、もしかしたら手錠の力でスタンド自体も動けなくなるのかもしれない。自働操縦型や軍隊型ももしかしたら使えなくなるかもしれない。ただけれどエアロスミスには四肢がない戦闘機だ手錠の効果も受けない今までの痛みぶつけてやるフーカーアアアアアアアアアアアア!!!」

プロローグ 4

この世界では空を飛ぶことが出来るのは1人もいない。魔法で似たような事をする事が出来るが結局は長時間滞空することは難しく、ましてや風を切る音をたてながら小さな穴が均等間隔で空いた円柱が自分に向けられてるのを見て驚愕し、頭で理解しようとして、結果フーカーが硬直してしまうのは無理のないことであった。

「撃ちまくれエアロスミス!!」ドガガガガガ「?!!:チツ」フーカーは自分に向かって飛ばされた「ナニか」を見て直感的にアレはまともに受けてはいけないものだと感じ取り、フーカーのスタンド『ジャック・ナイフ』で数発弾きながらも小屋の外に逃げ出し、森の中に逃げ込んだ。

…クソツ、あのガキやつぱりスタンド使いだったか。

それもなんだあのスタンドは宙に浮いているスタンドなら何回か見たことはあったが、あんな風に空を自由自在に飛び回るスタンドなんて見た事がねえ。

だが、森の中に逃げられたのはいい状態だ、森の中だったら憶測で探したところでところで木が邪魔でよく見えねえはずだから見失う。

この森の抜け道からブガラと合流してあいつにあのガキを自殺のように殺させればいいだけだ。「姐さんっ、姐さんっ」おっ！割と早く来たな。

「ブガラッ！今すぐあのガキの四肢を操作して自殺させろ」「大変なんだ姐さん、あのガキッ」?!どうした?まさか、逃げられたのか?」

「違います。俺もあのガキがスタンド出して、それで見たことの無いスタンドだったから唾然となって、姐さんが逃げた瞬間このままじゃ不味いと思って、自殺させようとしたんです。そしてr『ブロロロ』えっ!!!」

なんだ、まさか!!! と思い当たりを探したら少し離れたところにあ

のガキのスタンドが飛び回っていた。

スタンドがあるっていうことはあのガキはまだ生きてるってことかよ。だがということだ？

ブガラのスタンドの命令は絶対だ、ブガラが能力を解除しない限りあいつの四肢はあいつの意思で動かさず自殺させることなんて簡単に出来るはずだ。

あのスタンドにスタンドの能力を消す力でもあるのか？

「ヒイツ」シッ

(静かにして身を隠せ、ここは手入れもされていないけもの道だ身を伏せていればそんな簡単には見つからねえ。) ハアハア

そうだ来るわけがない、あれくらいの高さじゃ木の枝が邪魔をして見えないんだくるわけがない。

『ブロロ……』

オイッ、いつまでここら辺にいやがる、とつとどっか行けよ。クソッ焦ってるせいかブガラの鼻息がうるさく感じる。

『ブロロロ』

ヨシー！別の所に動きはじめt

『ブロロロロロ』

ナニッ！何故こつちに気やがるんだ!? と思った瞬間また白く光る何かを飛ばされた。

『ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ』

フリーカーが逃げ出した瞬間少年は2つの選択肢を思い浮かべた。

1つ目はこのままフリーカーの能力の範囲外まで逃げてしまうこと。

だが、これを実行する際に1番の問題はブガラのスタンド能力である。

ブガラの能力に対する方法は思い浮かぶがそれをしてしまうと、

フーカーの能力の範囲外に逃げるのが厳しくなるため1つ目の選択肢は無くなる。

必然的に少年は、消去法で2つ目の選択肢の行動をした。

いや、しようとした。

自分の腕が、自分の四肢が己の意思とは別に動き始め、少年の周りに置いてあったカメラに向かって歩き始めた。

「ヤバい、まさか手錠の男このカメラを俺の頭にぶつける気なのか！」少年の意志に反して確実に足はカメラの方に向かっていき、手もカメラの方に伸ばし始めた。

カメラはとても重く、それを自分の頭に叩きつけられると少年の頭はきつと耐えることは出来ないだろう。

だが、今、少年の近くにはエアロスミスが飛んであり、呼べば直ぐに戻ってこれるくらいに近くにいる。

しかし、それは少年にとってはなるべく選びたくない選択肢だった。

そして少年が僅かに躊躇していると。突如、少年の手錠から口のようなものが浮き出始め

『よお、聞こえているか？今からお前の頭を近くにあるカメラでぶつ潰すが、もしお前が自分のスタンドを消してくれるらだったら両足を潰すだけで勘弁させてやる。』

「……それは絶対にしない。」

『ハア？』

「今ここでエアロスミスを消して両足を潰されたら、それこそ本当に僕はこの理不尽に身を任せてしまう事になる。」

少年はこの選択はしたくなかった。

「それだけは絶対にしない」

しかし、もしここで彼らの理不尽を受けてしまったら、それは少年の人生を自分で諦めることと同じだと理解していた。

「あんたらみたいに、自分勝手に人の人生を弄ぶようなグズの、」

少年の『覚悟』は、あの時に既に出来ていた。

「言いなりになつてたまるかよおおお」

『……………ぶっ殺す』

「やれるものならやってみろ」

そして少年の手がカメラを掴み高く上げた瞬間

「俺の手首と足首を撃ち抜け、エアロスミス!!」

ブロロロロ ドガガガガガガ

『ナニツ!!』

エアロスミスの機銃が少年の四肢についてる手錠と足錠を、少年の手首と足首ごと撃ち抜いた。

「痛つてええええええええええええええええええええええ、」ガシヤン

『正気かお前は自分の四肢の動きを止めるために手首と足首に重症を負わせて止めるなんてガキが考えつくことじゃねえぞ!!!』

「確かに普通はそんな考え持たねえし、ましてや実行しようとは思わねえ。現に今でも少し後悔してるよ。」

『だったら何故お前はこんな事をしやがつて「自分の人生を諦めたくないからだ。」ハア?』

「この世界に来てすぐによあんたら見てえな奴らに捕まって、その上、理不尽な2択を突きつけられた。たけどよ、ここでその理不尽に身を任せてしまったその瞬間それは自分の人生を生きてるって言わなくなるんだ。それが分かった瞬間にもう俺は、「覚悟」を決めていたんだ。例え自分がどれほどの傷を受けようともこの世界の理不尽に抗つてやるってことを決めてたんだよ!!!だから今ここであんたらを倒させてもらうぞ!!!」

少年のスタンドがフリーカーに向けて攻撃をした瞬間ブガラはフリーカーの前に出るように立ち出した

「ザ・タブレッツ」

ブガラの前に、ブガラと同じ大きさの屈強な体型のスタンドが現れエアロスミスに掴みかかった。だが……

『ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ』

エアロスミスの攻撃をすべてブガラが受けてしまうことになった。

「おいっ！やめろブガラ、その攻撃からよk「お”れ”が、”ごい””づの”攻撃を”受け止め”ま”ず、”だがら”姐さんはこの”スタンドを斬つてください。これが俺の『覚悟』です!!!”ナツ!!!”

「ああわかったよ、お前の覚悟をしっかりと受け取ったぞ。 『ジャツク・ナイフ』」

そしてフリーカーはのナイフがエアロスミスに数ヶ所深い傷を付けた。

「グハッ!!」

小屋の中で倒れ込んだ少年は手錠から再び聞こえるようになった声を聞き、自分の体に数ヶ所深い傷後がつき始めた。

「ハアハアハアハア、痛てえ、あの二人最後の最後に『覚悟』を決めやがった…例えどちらかが死んでしまっても、僕にトドメを刺すために。」

だが、聞こえてるだろフリーカー、ブガラ!!!あんなら2人の『覚悟』は分かっているさ、だけどよオ、こっちもここで抗うのを辞める訳にはいかねえんだよ。」

